

それでも『戦争反対』・『いのちは大事だ』と言えますか？

～ 「同調圧力」を意識した歴史教育の一事例 ～

地歴公民科 飯島智一

## 1. はじめに

はじめに断わっておくが、私は「平和はありがたいことであるし、その価値は伝えたい」とは思っている。しかし、生徒に無条件で「平和は至上であり、戦争はしてはならない」という気はない。あくまでも「平和賛成」か「戦争止む無し」と考えるかは生徒の個々の判断に任せたいというのが私の本音である。

例えば今、外国が理不尽な条件で攻めてきたり、理由もなくミサイル攻撃をしてきて家族・親類・友人・知人らが無残に殺されたとしよう。その時、私は冷静に「平和が至上であり、戦争しないことが大事だ」と言い切れる自信がない。あるいは仮に自分の家族・知人らが殺されなかったとしても、このような状況下になって、世論全体が「自衛のために戦争止む無し」となった場合、私は「戦争反対」と叫ぶ自信がない。おそらく犠牲者が出ている中で「戦争反対」というのは犠牲者の遺族に対して申し訳が立たないと判断すると思う。

このような想定にたつとき、「戦争はよくないこと」「いのちは大事だ」ということはあくまでも絶対的な思想たりえないことが分かる。あくまでもこれらの概念は、悪い言葉を使えば幼少期からの学校現場での教育などによって無条件に「刷り込まれたもの」なのである。そして現在の日本が全体として「平和尊重」という雰囲気にあるために成り立っているのである。

このことは決して悪いことではない。しかしこの考えはやはり「刷り込み」でしかないものであり、絶対的ではないという認識は必要である。悪い言葉を使えば、この「刷り込み」は、大衆扇動・世論の作り方次第では、あっさりと崩れ去るものであると私は考えている。

近年、「同調圧力」という語が注目されている。同調圧力とは「特定のグループが意思決定を行う際に、少数意見を有する者に対して暗黙のうちに多数意見に合わせることを強制すること」と定義される。現在の私たちは「戦争はよくないこと」という雰囲気の下にいる。おそらくこの雰囲気の中では「戦争賛成」という者は暴力崇拜者という形で非難される同調圧力がかかるだろう。

しかしかつての日中戦争・太平洋戦争前後においては「忠君愛国、戦争は当たり前、お国のために尽くし死ぬことが正しい」という雰囲気があった。その中において、「戦争はよくない、いのちは大事だ」という発言は時流に逆らうものとして弾圧された。あるいは、それ以前に同調圧力がかかり、たとえその気持ちを持っている人がいても発言自体が憚られたのである。

以下の史料を見ていただきたい。

1931  
9/6の  
コラム

### 武力解決とその 正当性

支那国民は絶対的教科書をもつて全国の小學校徒に向ひ『日本人より朝鮮、滿洲、琉球を奪還すべし』と煽つて居る。此の結末は戦争となることを明白である。

國際連盟は絶対に戦争を禁止しておらず、禁止の条文もないことは確かである。さらに言うなら日本がやっていることは自衛であり、為すのではないのである。武力を用いても戦争をしているわけではない。この様にするのは國際連盟規約に違反していないし、不戦条約にも反してはいない。この点において間違っていないのである。

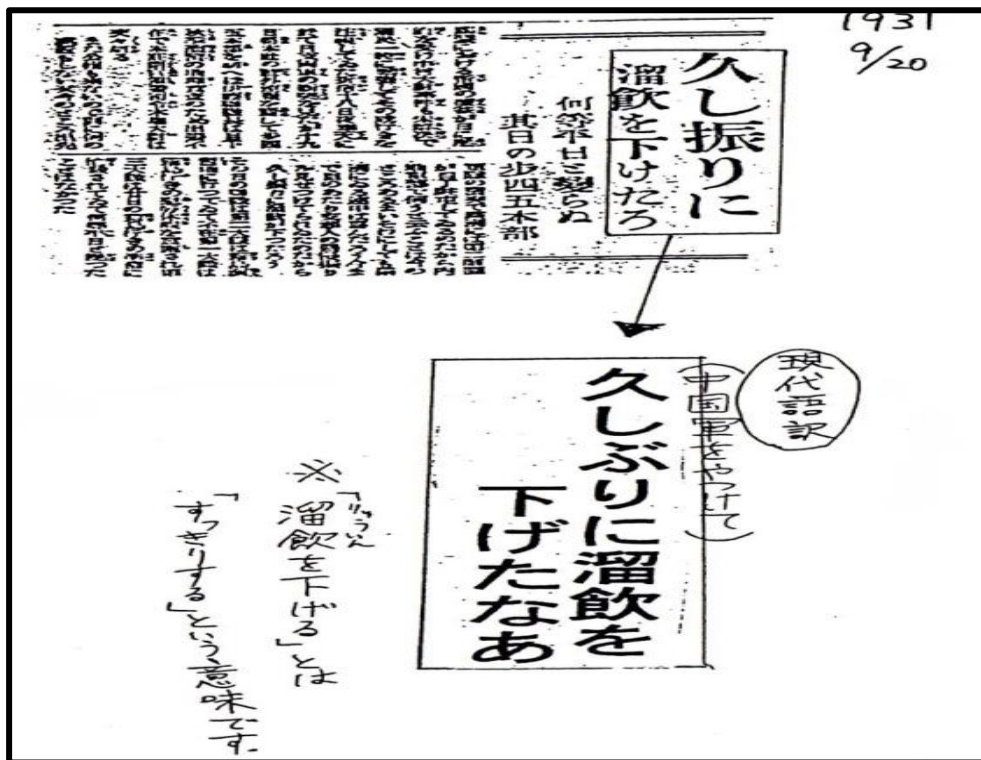
Bohnenkorn

### 現代語訳

○武力解決とその正当性  
支那（中国）国民は官製の教科書をもつて全国の小學校徒に向ひ『日本人より満州、台湾、朝鮮、琉球を奪還すべし』と煽動しつつある。此の結末が戦争となることは明白である。

國際連盟は絶対に戦争を禁止しておらず、禁止の条文もないことは確かである。さらに言うなら日本がやっていることは自衛であり、為すのではないのである。武力を用いても戦争をしているわけではない。この様にするのは國際連盟規約に違反していないし、不戦条約にも反してはいない。この点において間違っていないのである。

これは現在の南日本新聞の前身である「鹿児島新聞」の1931年9月6日に掲載されたコラムとそれを現代語訳したものである（なおこのコラムを執筆したのは当時の大学教授である）。読めば明白だが、「國際連盟は絶対に戦争を禁止しておらず、禁止の条文もないことは確かである」「日本がやっていることは自衛であり、為すのではないのである」といった文章が並ぶ。「日本国憲法は自衛のための武力をもつことを禁じていない」「日本はあくまでも自衛であり、戦争はしない」といった現代の日本政府の見解に何か通じるものがある。そして1930年代の新聞各紙にはこのような記事が一部ではなく、全面的に押し出されているのである。挙句の果て、満州事変（日本が中国侵略を本格的に始めた出来事）が始まった直後の1931年9月20日の鹿児島新聞の記事は以下のとおりである。



もちろんここには掲載できないが、一般読者からの投稿意見も戦争肯定の意見しか見られない。「戦争反対」「いのち大事」という内容は寸分もない。

よく「日中戦争・太平洋戦争などは軍部が主導したものであり、国民は協力体制を余儀なくされたものである」という考え方がある。確かに主導したのは軍部であり、戦争末期にあっては国民は強制的に協力させられた部分も多かろうと思う。しかし戦争が始まる以前に軍部の独走を後押しし、戦争へ導くお膳立てをしてしまったのは間違いなく、「忠君愛国、戦争は当たり前、お国のために尽くし死ぬことが正しい」と信じていた日本国民なのである。果たしてこのような中で、私たちは「戦争反対」「いのち大事」と主張できるだろうか。前述したとおり、おそらく大きな同調圧力がかかり言えないのではないだろうか。

歴史を学ぶ際には、自分たちの常識をあてはめてはいけない。その当時の世相をある程度理解し、その上に立った見方をしていかなければ理解が表層的なものになってしまう。そしてまた、生徒の常識に「揺さぶり」をかけるものでなくてはならない。そうでなければ歴史が、単なる「知識」でとどまり、人生における指標の1つとしてとらえられないからである。まさにこの戦争に対する「当時」と「現代」の考え方の違いはその好例であるといえる。したがって今回、私はこの違いを生徒に伝える授業をおこなうことにした。

この文章では授業についての説明とそれに対する生徒の反応を示し、「当時の世相を考察した上での『戦争・平和』に対する考え方」を考察したい。

## 2. 研究方法

私が先日おこなった授業である「戦時体制について考えてみよう」について検討を加え、その授業を受けた生徒の反応を挙げて、分析をおこなう。

### 3. 研究内容

#### (1) 授業についての補足説明

まず、私のおこなった授業の詳細については指導案を参照にさせていただきたいが、いくつか補足説明をしておく。

「プリントNO1 ① 設問1 軍歌『露営の歌』を聞いて感じたことを書きなさい」についてだが、生徒には「夢に出てきた父上に『死んで還れ』と励まされ」の一節を挙げて、「このお父さんは息子にどのような気持ちを持っているのだろうか？」と問うた。またその後の「覚めて睨むは敵の空」の一節も挙げて、この時の息子の気持ちも問うた。

「プリントNO1 ② 設問3」の(1)～(3)は特に、突き放すような形で生徒に問うた。特に(3)については答えてくれた生徒に「口に出して言えなかったら死んでしまうよ。それでもいいの？」というような問いを無機的に重ねた。

「プリントNO2 ② 設問4」の(2)についても特に生徒に意見を求めた。軍隊経験の良さを語る文章に対して生徒がどのように感じるかを私自身も知りたかった。

#### (2) 授業を行ったクラス・授業状況について

この授業は進度の都合上、3年普通科理系と3年情報ビジネス科に対してのみ行った。深刻なテーマだったのもあって、生徒全員が真剣に取り組んでくれた。50分で終わったが、時間ぎりぎりであり、最後の感想を生徒に書いてもらうに十分な時間が取れなかった。それでも生徒は一生懸命に自分の考えたことを綴ってくれた。

#### (3) 生徒の意見

以下は生徒の代表的な意見である（なお後ほど分析しやすいように、通し番号をふった）。

##### 【設問1 に対する生徒の意見】

- ①現代と違って、当時の人々にとって戦争はカッコいいものであったと思った。戦死することを正しいと思っている。
- ②死ぬのが名誉あることのような歌詞。戦争をするのがいいことのように歌っていた。
- ③自分ではうまく想像できない歌詞ですりこまされている気がした。
- ④「死」や「弾丸」「敵」などの言葉が容易に使われ、戦争のためにある歌だと感じ、少し恐怖を覚えた。
- ⑤戦争に行くことが良い、偉いことだと思っている。
- ⑥敵を殺すことが手柄だと考えている。
- ⑦父親は本当は死んでほしくないけど、選ばれたからには自分を犠牲にしてみんなのためにならねばれと言っていると思う。息子は父に言われた言葉を胸に敵と戦う決心がついたと思う。

【設問3 (3) に対する生徒の意見】

- ⑨この教育をされていたらできない。
- ⑩心では思っても、周りに流されて言える気がしない。
- ⑪言えない。国を裏切る行為だと思うから。
- ⑫言わないけど、どうせ死ぬなら戦う。
- ⑬言えない。言ったら他の人から反逆者と思われころされてしまう。
- ⑭先生に教えられていたことが大切なことだと思っているはずなので言えない。
- ⑮きっと心の中ででもそんな風に思えない。死ぬことが一番だと思う。

【設問4 (2) に対する生徒の意見】

- ⑯軍隊にはいい面もある。
- ⑰軍隊に入るといいことがあると書いてあって、悪いところは書いていない。
- ⑱「軍隊は良いものである」と言わされている感じがある。
- ⑲軍隊の生活がいいと思うくらい、農民の生活がきつかったんだろうなと思った。軍隊に入っ  
てよかったという人もいたんだなと思った。
- ⑳農民兵士は軍隊さんから親切にしてもらって安心する場所になっている（頭がおかしくなっ  
ている）
- ㉑日本の当時の教育が全然いきとどいていないのが分かるし、兵になることは暮らしを豊かに  
することにもつながっていたと思います。けどそれまで白米が食べられなかったことを考え  
ると市民はとても苦しかったと思う。

(4) 生徒の意見の集約・分析

設問1については、生徒の意見①に集約される意見が多かった。

おそらくこの父親は息子が大好きでとても愛情を持っていると思われる。その愛情を最大限に表現した形が「死んで還れ」なのである。そして息子は間違いなくこの父親の気持ちを嬉しく受け止めたに違いない。その喜びと決意の気持ちが「さめて睨むは敵の空」なのである。このような、親子の絆を感じ合っている矢先に「いのちは大事なのです。死んではいけません」と水を差すことができるだろうか。なお⑦の意見は、やや現代の私たちの考え方も交じってしまったかもしれないが、もしかしたら父親はこのようなも考えていたかもしれない。「お国のために死ぬこと」と「愛する息子に死なないでほしい」という矛盾する考え方をうまくまとめていると感じた。

設問3 (3) についてはおおかたの生徒は「できない」と答えた。しかし答えないと間違いなく「死」を迎える。それについて言及した意見はなかったの、前述したとおり私は「ここで発言できなかつたらみんなは死んでしまうんだよ。それでもいいの？」と問うた。大方の生徒は黙ったままであった。何人かの生徒が⑫の意見のように「やはりこの中では『命は大事だ』と発言できないので、どうせ死ぬなら戦って死ぬ」と答えてくれた。私にとっては⑮の意見が想定外の意見であった。つまり「命が惜しい、という考え方すら出てこない」というわけである。当時の人

はこのような考え方の人も多かったかもしれないと思わされた。

設問4(2)については、いろいろ生徒の意見も出てきた。授業の指導案の部分でも書いたが、私はこの文章を「経済的な裕福につられたため、戦争・軍隊を肯定した意見。暴力を肯定する軍隊に染まってしまっている考え方」ととらえた。確かに戦争は経済を好転させる力も持ちうる。そしてそれが現代においては戦争を引き起こす原因の1つになっているのである。これが私が生徒に対して期待したこの史料の読み取りであった。

大方の生徒の答えを私は想定していたが、⑱だけは想定していなかったので非常に新鮮に感じた。つまり⑱の意見は、この農民の発言すら「軍部によって言わされたのだ」ととらえたのである。たしかにその可能性が無いわけではない。私自身、はっとさせられた。

#### 4. おわりに

今回の授業で挙げている1つのテーマは『戦争賛成』という同調圧力がかかっている中で、自分の倫理観を貫けるか」ということである。多くの人が戦争を美化し、推奨している中で現在の私たちの倫理を表にはたして出せるものだろうか。大方の生徒が感じている通り、ほぼ無理であろう(生徒のいじめ問題も似たようなものである。傍観者も悪い、と言われるが実際、雰囲気ができあがってしまうと、そこで声をあげていくのはかなり難しいと思われる)。したがって、このような雰囲気ができる前に、早期の対処・早めの反対の声をあげていくことが大事であるということがいえる。一度できあがってしまった全体的な雰囲気に対して反対の声をあげていくのは非常に難しいことなのである(これは「ハンセン病問題」などとも多く共通する部分がある)。

冒頭でも述べたとおり、私はこの授業では、生徒に「一度支配的な世論が形成されてしまうとそれに抗うことはなかなか難しい」ということを伝えられれば充分であると考えている。そしてその上で「平和賛成」か「戦争止む無し」と考えるかは生徒の個々の判断に任せたいというのが現在の私の考えである。

一方で、敢えて平和教育の側に立つとすれば戦争賛成の雰囲気を作らせないためにも、冒頭でのべた「戦争はよくないこと」「いのちは大事だ」といった「刷り込み」を教職員は絶えず、意識して生徒へおこなっていく必要がある。これこそが平和意識・人権意識の涵養であるといえるだろう。

#### 5. 参考文献

- ・『鹿児島新聞』(1931年分)
- ・『まるごと社会科 中学・歴史(下)』(平井美津子・本庄豊・岩本賢治, 喜楽研, 2011年)
- ・「露営の歌」(<https://www.youtube.com/watch?v=6hceN>)

6. 授業案・使用プリントなど

「日本史B」学習指導案（簡易版）

日 時：平成27年11月  
 学 級：3年生（理系5名，文系13名）  
 場 所：本館3階各教室  
 授 業 者：飯島 智一

1 単元名 教科書には無し

2 単元設定の理由

学校教育の授業および知識には大きく分けて2種類あると私は考える。1つは受験・センター試験などに役立つ『試験合格の手段としての授業・知識』，もう1つは実生活や今後の生徒の人格形成に影響を及ぼすと考えられる『人生や社会生活に役立つ授業・知識』である。本来の「学問」の本質は，おそらく後者の授業・知識観に近いと思われる。しかし進歩や国際社会のめまぐるしい変革に遅れずについていくためには前者の授業・知識観も軽視することはできないのである。

基本的に私は本校の授業は前者の授業・知識観のもとで進めている。しかし「第2次大戦」「太平洋戦争」を扱うにあたっては後者の授業・知識観を重視する必要性を強く感じている。「なぜ日本が戦争に突き進んだのか」「戦争は回避できなかったのか」「戦争の実態はどのようなものであるか」を考えさせることは，今後の歴史を担っていくであろう生徒たちが「自らの意志でよりよい社会（それは必ずしも「平和」である必要性はないと私は考えているが・・・）を作っていくこと」へつながるからである。

ただし戦争を扱う授業が「客観的視点」だけで終わってしまえばそれは他人事あるいは物語にしか過ぎない。あくまでも自分たちが当事者であるという「主観的視点」で取り組ませることに意識をおきたい。「嫌だ」「したくない」「悲しい」といった一次的感情を純粋にもたせることこそ戦争に歯止めをかけ，平和をもたらす手段であると私は考えるからである。ただしこうした授業は刺激が強くなるため，発達段階に応じた配慮が必要となる。

したがって本時の授業は「受験日本史」という枠から離れたものとなる。繰り返しに成るが，この授業が，今後の歴史の構成者たる生徒の「戦争観・平和観」をつくることの一助になることを期待する。

3 単元目標 教科書には無し

4 生徒の実態

3年生は雰囲気は全体的には静かであり，授業態度・反応も良好である。中には非常に歴史に興味を抱いている生徒もいる。後は生徒全体が歴史的事象を自分のこととしてとらえて考えさせる習性をつけてもらいたい。

5 本時の指導

(1) 本時の目標

- ① 今の私たちの常識とは異なる「戦時体制」における日本人の思想を推察する
- ② 「戦時体制」の中で自分の意志は貫き通せるかについて考える
- ③ 「戦時体制」を作らないための全体的な民衆の力・教育の力について考察を深める

(2) 本時の展開

過程	指導内容	学 習 活 動	指導上の留意点	資料
導入 3分	本時の授業の趣旨説明  3つの問題提起を行う	・話を聞く  ・話を聞く	・「本時はあまり受験には関係ないが今後の人生・社会を考える際に必要となる」ことを伝える。  ・本時の3つの問題提起を話す 答えをかけそうな生徒には書	

			かせてもよいが、まだこの段階では強要はしない。	
展開1 10分	軍歌に垣間見れる当時の思想について考える	①「露営の歌」を聞く ②設問1を考える (自分1人で) ・特に、「 <u>夢に出てきた父</u> 」はどのような気持ちでいるのか、それを聞いた兵士はどのように考えたかを推し量る  ③みんなの意見を聞く ④教師の注意を聞く	・軍歌を聞かせるにあたって「不愉快に思う人もいたり、右翼的思考の助長もある」という注意は行う  ・「カッコいい」という一次的感情が判断を誤らせる危険性を持つことは注意する	設問1 パソコン
展開2 10分	沖繩戦の集団自決に見られる当時の思想について考える	①設問2(1)を書く ②設問2(2)を考える ③(2)について発表した りみんなの意見を聞く ④No.2の史料1を読み合わせる ・体調が悪くなったら先生に言ったり、耳を伏せたりする  ⑤設問2(3)(4)を考える ⑥先生の話聞く  ⑦テーマ①について自分なりに答えをまとめる	・この内容で気分を悪くする生徒も考えらえるので配慮する。場合によっては伏せたりすることも許可する  ・この集団自決で子どもに手をかけた親も、「露営の歌」の父親も共通して「子どもを愛するがゆえの行動」であることに気付かせ、このような現代の我々に理解しがたい愛情表現を生むのもまた戦時体制であることを説く	設問2  史料1
展開3 10分	沖繩戦の状況などを通して「戦時体制の中で自分の意志を貫けるか」を考える	①「史料2 沖繩戦説明のマンガ」を読む ②設問3の(1)(2)(3)を考える(生徒同士で話し合う)  ・時間があったら設問4も取り組む。なかった	・設問4(2)で扱う史料4はこれまでの流れとは異質の史料	史料2  設問3



		ら行わない)  ③テーマ②について自分なりに考えをまとめる	で「軍隊礼賛」の内容である。しかしあくまでも「暴力肯定」であるということ、その後「経済的富裕」を得て満足していることに気付かせ、戦争が経済至上のもとにあたり、暴力志向を助長することを理解させる。
まとめ 10 分	まとめと示唆	①テーマ③について考える(自分1人で) ②意見を発表する ③先生の話聞く  ④感想を書く	・「感じ方は自由である。それでも戦争が必要であると思うならそこに異論はないが、少なくともこのような悲劇が起こることを理解した上で、上からの押し付けでなく自分の意志で選んでほしい」という旨を伝える

#### 6 評価

- ① 自分たちの常識にとらわれずに、当時の常識・雰囲気・体制を理解できたか(理解・思考・判断)
- ② 各史料の内容を読み取れたか。(知識・理解・資料活用技能)
- ③ 今後の日本におこりえそうな政治状況・類似性とその問題点を感じ取ることができたか。(知識・思考・判断)
- ④ このような体制づくりに寄与する民衆の力・教育の力に気付けたか。(思考・判断)

#### 7 使用教材・参考史料など

- ・教科書：『詳説 日本史B』(山川出版社)・副教材：『新詳日本史』(浜島書店)
- ・『まるごと社会科 中学・歴史(下)』(平井美津子・本庄豊・岩本賢治, 2011年)
- ・「露営の歌」(<https://www.youtube.com/watch?v=6hceN>) 他

## 戦時体制について考えてみよう！

( ) 組 名前 ( )

### 【テーマ】

- ① 今の私たちの常識とは異なる「戦時体制」における日本の人々の考え方はどのようなものだったのか？
- ② 「戦時体制」の中で自分の意志は貫き通せるのか？
- ③ 「戦時体制」を作らないためにはどのようなすればよいのだろうか？

① 今の私たちの常識とは異なる「戦時体制」における日本の人々の考え方はどのようなものだったのか？

### 【解答欄】

### 【設問1】

軍歌「露営の歌」を聞いて感じたことを書きなさい。

【一番】 勝つてくるとぞ勇ましく 奮つて國をでたからは  
手附立てずに 死なれようか  
【二番】 進軍ラッパを吹くたびに まぶたに浮かぶ旗の波  
(省略) 弾丸もタンクも銃剣も しげし露営の草枕  
【三番】 夢にでてきた父上に 「死んで還れ」と願まされ  
覚めて醒むは敵の空

### 設問1 解答欄

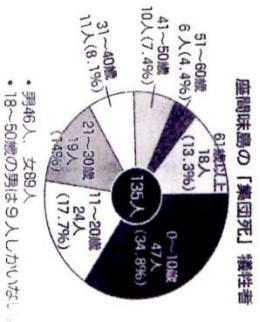
### 【設問2】

沖繩本島より前 (1945年4月～6月) であった悲劇についての設問に答えなさい

(1) 集団自決とは何ですか？

(1) 解答欄

(2) 沖繩本島より前 (3月28日) にアメリカ軍が上陸した座間味島、渡嘉敷島では集団自決が発生しました。下の円グラフは、その犠牲者の数を年齢別に示したものです。どのようなことに気付きますか？また人々はこのようにして命を絶ったと考えますか？



(2) 気付くこと

(2) 命の絶ち方

(No.2) の「史料1 証言」を読んでから設問に答えなさい)

(3) 当時、人々は米英軍のことをどのようなふうと呼んでいましたか。漢字4文字で書きましよう

(3) 解答欄

(4) なぜ人々は降参せずに、集団自決を選んだのでしょうか？予想してみましよう

(4) 解答欄

## ② 「戦時体制」の中で自分の意志は貫き通せるのか？

【解答欄】

### 設問 3

No.2の「史料2 沖繩戦の説明のマンガ」を読んで、設問に答えなさい。

- (1) 7コマ目の女の子が「先生！死にます！」と言っている生徒はどのような生徒だと思いますか？下から選んで○で囲みなさい。
- ア. 日ごろ先生の言うことを聞いていない真面目で心優しい生徒  
イ. 日ごろ先生の言うことを聞かず自分勝手にケンカばかりしている生徒  
ウ. 大人ぶっている生徒  
エ. 生き方を考えることを面倒がっている生徒
- (2) 8コマ目の先生が「すまない」といって泣いていますが、何を思っ泣いていると思いますか。一番適切だと思われるものを、以下の中から選んで○で囲みなさい。
- ア. これから共に死んでいく生徒に申しわけないと思っ泣いている  
イ. これから共に死んでいく生徒の保護者に申しわけないと思っ泣いている  
ウ. これから自分は生徒と死ぬが、残された自分の家族に申しわけないと思っ泣いている  
エ. これから自分は生徒と死ぬが、天皇陛下のお役にたてず申しわけないと思っ泣いている
- (3) あなたはこの7コマ目・8コマ目の状況の中で「降参して捕虜になりました。命は何よりも大事です」と口に出して発言できそうですか？

(3) 解答欄

### 設問 4

No.2の「史料3, 史料4」を読んで、設問に答えなさい。

- (1) 史料3を読んであなたは召集令状が来たら逃げられますか？

(1) 解答欄

- (2) 史料4を読んであなたが感じたことを書きなさい。

(2) 解答欄

## ③ 「戦時体制」を作らないためにはどのようなすればよいのだろうか？

【解答欄】

【本日の授業を受けた感想を自由に書いてみてください】

【参考文献など】

- 『まるごと社会科 中学・歴史（下）』（平井真津子・本庄豊・岩本賢治、喜楽研、2011年）
- 「歴宮の歌」 (<https://www.youtube.com/watch?v=6hccN>)

【史料1 証言】

渡瀬敷島の証言

渡瀬敷島の集団自決（犠牲者289名）は、3月28日米軍上陸の翌日に発生しました。しかし、実は、その1週間前、軍は、兵器軍曹を通して村役場の男子職員や青年たちに手榴弾を配り、「敵に通達したら、1個は敵に投げ込み、他の1個で自決しなさい」との指示を与えていたのであります。

……村の若壮年と防衛隊員に配られた手榴弾が、1個ずつ手渡され、その周りに家族・親戚が10人、20人とむらかりました。私どもの家族には手榴弾がありませんでした。炸裂音と共に悲鳴が上がります。しかし、手榴弾を抜いて発火させようとしても、操作三つ又も手当てが多くが不発に終わりました。従って、手榴弾による死傷者は少数にとどまったのです。そのことが、逆に恐ろしい惨事をまねく結果になるとは、誰が想像しえたでしょうか。

その後は、混乱状態に陥りました。迫撃砲の主砲にはじき飛ばされ、私は自分の死を確認していましたが、体の一部をつねってみてまだ生きている自分を確認します。

……どれほど時間が経ったかわかりません。突然、私の目に一つの異物が映り込んできました。一人の中年男性が、一本の小木をへし折っているのです。私も、その手から目をこらしました。男性はついに小木をへし折りました。そしてその小木を手に握られるやいなや、それは凶器へと変わったのです。彼は自分の愛する妻子を三つたように絞殺し始めました。この世で自撃したことのない、いや想像したことさえも、惨劇が、私の眼前に出現したのです。私もも住民は、愛する肉親に手をかけていきました。地獄絵さながらの阿鼻血喚が展開していったのです。カミソリやカマで頸動脈や手首を切ったり、ひもで絞め殺したり、棍棒や石で頭をたたくなど、斬撃すべき様々な方法がとられました。母親に手を賣したとき、私は悲痛のあまり号泣しました。

私たちは生き残ることが恐ろしかったのです。我が家は両親弟妹の4人が命を絶ちました。混乱と絶望の中にも、幼いもの・女性・老人など、自らは死ねない弱いもの、弱いものを先に処理してから、男たちは死んでいく、という手帳があったように思います。決して、われ先に死に赴く男性は、一人もありませんでした。

愛するものを放置しておくということは、彼らも、最も恐れていた「虎齧米突」の手に委ねて絞殺させることを意味したからです。私もは死の真になってしまっていたのです。

（金城重明著「集団自決を心に刻んで」高文研より）

【史料2 沖繩戦の説明のマンガ】

